

第五章 敷設船艇敷設艦兵装艤装

第一節 水雷敷設船艇

第一項 有線水雷敷設船艇

水雷敷設事業ヲ迅速確實ニ施行スルニハ必ズ適當ニ兵装艤装セラレタル船艇ヲ要スルモノニシテ明治十五年前後ヨリ漸次所要船艇ノ若干ヲ製セシガ當時ニ於ケル斯種船艇中ノ最大ナルモノハ第二震天トス其ノ要目左ノ如シ(之ヨリ先キ第一震天製造セラレシガ第二震天ト同要目ナルモ専ラ攻撃用即チ魚形水雷主用ノ目的ニ出デタリ)

第二震天要目(明治二十年六月竣工)

全長一六呎八吋 最大幅一九呎八吋 吃水七呎四吋 排水量一七四噸 速力一〇・八節 馬力二五六
庫量一七・七

(備考)第二震天モ亦其ノ後發射管ヲ裝備スルニ至リシハ既述ノ如シ而シテ有線水雷敷設ニ兼ヌルニ敷設面ノ警戒監視竝ニ關係小船艇ノ母艦任務ヲ以テセルモノナリ

一般ニ有線水雷敷設用トシテ使用スル船艇ハ 一、引船 二、運貨船 三、敷設艇 四、「スチーム、ピンネース」五、傳馬船ノ五種ニシテ之等ノ員數及要目等ニ至リテハ素ヨリ一定ノ制規アルニアラズ

主トシテ各敷設區ニ於テ使用スル水雷種類、水雷倉庫ト布設原トノ距離形勢等ニ依リ之ヲ定ムルモノナルガ明治三十六年九月達號ヲ以テ各敷設隊ニ附屬スベキ關係船艇ノ種類及員數ヲ定メタルハ蓋シ此種規程ノ嚆矢ナリ

左記ハ引船以下所要船艇ノ機裝要領及代表的船艇要目ノ一般ヲ示ス

船艇種類	用	途	所	要	機	裝	要	領	該管船艇ノ一例(艇名)	要	目	一	例
引船	一、曳船 二、雜用		(一) 馬力大 (二) 双軸推進器具備 (三) 船首尾ニ電纜曳導用「ローラー」及關係施設ヲ要ス (四) 前後部ニ蒸汽起重機ヲ要ス (五) 舷側ニ水雷懸垂設備ヲ設ク						第二震天 那沙美丸 天橋丸 回天丸 竹敷丸	竹敷丸 三十三年五月竣工 全長 一四六呎 噸數 三六六、 速力 一三節 馬力 六五七			
運貨船	一、接合濟ミノ水雷及諸 裝具搭載 二、敷設原附近ニテ敷設 艇ニ水雷渡シ方 三、引船ニ曳カレツツ倍 心電纜敷設		(一) 船幅廣潤 (二) 前後ニ舉揚力一噸以上ノ「アーム」附「デリック」ヲ備フ (三) 前後ニ「スチーム、ウインチ」又ハ手動「クラクレ」ヲ裝置ス (四) 舷側ハ水雷懸垂ニ適セシム (五) 船體ニ電纜收揚敷設用「ローラー」ヲ備フ (六) 錨具ヲ備フ						第一號 第一〇六 九號	第一號 二十年七月八日竣工 全長 六四呎 噸數 七六、 搭載量 四〇噸 完備水雷二群連テ搭載 シ得シムベシ			

敷設艇	水雷ヲ棧橋又ハ運貨船ヨリ受取豫定位置ニ沈置ス	(一) 艇體強固觸衝ニ堪フルコト (二) 水防區劃ヲ備フ (三) 双螺旋速度力十節内外 (四) 艇首ニ「アリック」一個及作業場ヲ後部ニハ電纜廻取扱ニ堪ヘシム (五) 正艇首ニハ突出セル「ローラー」ヲ設ケ電纜及鐵鎖等ノ揚收ニ便ス (六) 起重機及舷側ニ繫船柱ヲ備フ (七) 海圖室及操舵室ヲ設ク	第六號 第四十六號 第二百十號	第四十六號 二十六年九月竣工 全長 七九呎 噸數 六六、五 速度 一〇、四節
「スチーム、ピンネース」機動艇	電纜接続 水底電纜敷設 其ノ他通信業務	(一) 操縱輕便速度優秀 (二) 其ノ他敷設艇ニ準シ一般ニ輕小	二〇噸以下各種	
傳馬船	位置浮標配置、接續傳馬任務 其ノ他雜用	前後ニ電纜索具等導入ニ便ナル爲「ローラー」ヲ設ケ後部ニ日本槽二―三ノ使用ニ適セシム	三五呎以下各種	

要スルニ有線水雷敷設船艇ハ有線水雷其ノモノノ十年一日ノ如クナルト等シク殆ド進歩ノ見ルベキモノ無カリシハ

- (一) 水雷敷設面ノ水深等ハ既知ニシテ敷設速度ノ如キモ迅速ヲ要セザルコト
- (二) 比較的近距离ニ行動スル爲特ニ凌波性居住力等ノ大ヲ要セザルコト

(三) 其ノ長大複雑ナル管制用電纜ヲ有スルガ爲巧妙簡便ナル艦裝實施ノ困難ナルコト

等ニ依ルモノナリシガ三十七、八年戰役ノ實驗ハ從來ノ如キ船艇ヲ使用スル敷設法ノ極メテ困難ニシテ而カモ長時日ヲ要スルヲ痛感スルト共ニ一層敷設原ヲ前進セシムルヲ必要トセル要求ハ遂ニ大型敷設艇夏島丸測天丸以下ノ出現ヲ見ルニ至レリ而シテ夏島丸ノ要目能力等ニ就テハ左記四十五年度參謀長會議ニ於ケル軍令部次長口述ニヨリ其ノ一斑ヲ知ベキノミナラズ當時ニ於ケル當局ノ要望期待ヲモ付度セシムルモノニシテ有線水雷敷設ノ外甲種機雷敷設及大掃海要具ノ使用等ニモ兼用スルニ在リキ

明治四十五年(大正元年)參謀長會議ニ於ケル軍令部次長口述

大型敷設船ニ關スル件

新建造ニ係ル大形敷設船夏島丸ノ實驗ハ昨年十月以來歴次横須賀ニ於テ施行セラレ今ヤ其ノ性能明カトナレルヲ以テ之ニ多少ノ改良ヲ施シ以テ爾他同形船ノ計畫ニ着手スルコトニ決セリ即チ其ノ實驗成績及改良スベキ點等別紙ニ示スガ如ク此ノ種船型ハ甲種機掃水雷及視發水雷ノ敷設ニ適シ兼ホテ大掃海要具ノ使用ニ堪フルヲ以テ將來港灣防禦用トシテ恰好ノモノタルヤ疑テ容レザル處ナリ故ニ差當リ整備費雜船費トシテ已ニ豫算ニ計上セラレアル金額ヲ以テ此ノ種敷設船更ニ三隻新建ノコトニ決定セルモ是レ元ヨリ充分ナル數ニアラズ特ニ防禦計畫改定セラレ敷設面概ネ前進スルニ至ラバ益々其ノ不足ヲ感ズベキニ付當部ハ尙之ガ増補ノ必要ヲ認メ居ル次第ナリ

別紙

大形敷設船夏島丸

一、要目

長 二〇〇呎 幅 二二呎六吋 深 一四呎 喫水 五呎六吋

排水量 四三〇噸 實馬力 五九一 速度 一二節 炭庫全量 四四噸 給水量 六噸

兵裝 三吋砲二 落射機 二 視發水雷 一四個

甲種機雷 二〇個 此ノ二〇個ハ倉庫ニ格納シ得ル數ニシテ若シ上甲板ニ一時的搭載チ行ハバ約八〇個ヲ納メ得

二、實驗成績

(一) 航行中ノ機雷沈置ハ大体ニ於テ良好ナルモ落下設備ニ多少ノ改良ヲ加フル必要アリ

(二) 落射機ニヨル魚雷發射ハ良好ナルモ任務複雑ノ憾アルヲ以テ今後ノ同型船ニハ之ヲ備ヘザルヲ可トスベシ

(三) 大掃海要具ヲ以テスル掃海作業ハ良好ナリ

(四) 視發水雷沈置ハ小形敷設艇ニ比シ多少操縦上ニ困難ヲ感ズルモ熟練ヲ得バ深ク之ヲ憂フルニ足ラザルベシ而シテ運賃船ヲ使用セズシテ作業シ得ルコトハ特ニ本船ノ便利トスル所ナリ

(五) 本船操縦上ノ困難ハ淺喫水ニ加フルニ狹長ニシテ乾舷高ク且「パラスト、タンク」ニ縱隔壁ヲ有セザル爲復原力乏シキニ起因ス故ニ船ノ前後部ニ各十五噸ノ固定「パラスト」ヲ積載セシ結果大ニ此缺點ヲ補フコトヲ得タリ

三、今後改良ノ上建造セラルベキ同型船要目

長 一六二呎 幅 二五呎 深 一三呎 喫水 七呎六吋 排水量 四三〇噸 實馬力 六〇〇

速度 一二節 炭庫全量 六八噸 給水量 二五噸

兵裝 夏島丸ニ同ジ但シ落射機ヲ廢ス、其ノ他縫裝上多少ノ改良ヲ施サルベシ

然ルニ大正三、四年ノ交ヨリ有線水雷ノ聲價頓ニ失墜スルト共ニ甲種機雷敷設船艇ノ整備愈々急ヲ告グルニ及ビ遂ニ大正五年八月海軍々令部長ヨリ海軍次官ニ照會スルニ大型敷設艇改装方ニ關シ左記ヲ以テスルニ至レリ

大型敷設艇夏島丸及測天丸ハ當初ノ要求ハ浮漂水雷、甲種機雷、乙種機雷ノ流用主義ナリシガ新防禦計畫ノ實施及時勢ノ進運ハ甲種機雷ノ大量敷設ニ適セシメ一回ノ敷設數ヲ六〇個トシ同格納數ヲ増加セシメ尙乙種機雷倉庫及電纜船ヲ廢シ炭庫及水槽ノ擴大ニ充テ掃海用曳索裝置ヲ加工セラル様取計相成度云々

右改装ハ實現セラレルト共ニ大正四年五年ニ互リ建造ノ戸島、黒島、加徳、葦崎等モ同方針ノ下ニ
 機装セラレタリ

之ヨリ先キ各敷設隊所屬敷設艇ニハ三四式十八吋魚雷(海防水雷)使用ノ爲落射機ヲ裝備セル爲水雷敷設及魚雷發射ノ兩種訓練ニ努力ヲ要セシガ時運ノ進歩ハ之ガ妥當ナラザルヲ認ムルニ至リ大正二年一月敷設艇ニ魚形水雷裝備方ヲ廢止セリ蓋シ左記軍令部商議ニ基クモノナリ

現時各敷設隊所屬敷設艇ニ裝備スル三四式十八吋魚雷(海防水雷)ハ時代ノ經過ト共ニ漸次其ノ實用上ノ効能ヲ減少セルノミナラズ敷設艇ガ其ノ裝備魚雷ヲ敵前ニ使用シ奇功ヲ奏スルガ如キハ稀有ノ場合ニ屬ソ素ヨリ其ノ本務トスルトコロニ在ラザルナリ而シテ軌近作戰上ニ於ケル甲種機雷ノ使用範圍益々擴大セル結果軍港要害等ノ防禦上我が機雷ノ沈置ト敵機雷ノ清掃トハ新ニ敷設隊ノ重要業務トナルニ至リシテ以テ從來ノ如ク敷設艇ニ魚雷ヲ裝備シ敷設隊員ヲシテ其ノ本務ナラザル魚雷作業ニ從事セシムルトキハ唯ニ其ノ任務ヲ過重ナラシムル嫌アルノミナラズ隊員ノ注意ト研究心トハ自然此ノ比較的興味アル魚雷作業ニ傾注サレ易ク從ツテ前記ノ重要業務ニ對シ熱心ナラシムルコト難ク將來ニ於ケル敷設隊ノ發達上支障不彰ト認ムルヲ以テ自今敷設艇ニハ魚雷ヲ裝備スルコトヲ廢止致度

次大正五年ヨリ大正七年ヲ限リトシ我防備計劃上全然有線水雷(視發水雷)ヲ廢止シ名實共ニ此種船艇ハ無要ニ歸シ上記夏島丸以下ノ船艇モ當初ノ副務タリシ甲種機雷敷設及掃海作業ヲ其ノ本務トスル

